

---

# **大事なことはすべて失恋から学んだ**

坂上文隆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大事なことはすべて失恋から学んだ

### 【Zコード】

Z5839Y

### 【作者名】

坂上文隆

### 【あらすじ】

そのとき僕は失意のどん底にいた。あの日以来洋子が電話に出てくれない。本当に終わってしまったのか。僕たちは運命の人ではなかつたのか。洋子のことを強く思ったそのとき、携帯が鳴った。「自分に失恋を乗り越える方法を教えたる!」。彼女は天使のテン。僕がなぜ失恋したのか、そして恋愛する意味についてテンは説き、その日から失恋との壮絶な闘いが始まった。

## 第1話 幸せな人たちの共通点

十一月二十九日、この日に永江公園に来たのは三度目だった。どうしても今日来なければいけないような気がした。しかし来てみたはいいもののここで何をしたいのか、答えはいまだに見つからない。こうして一時間以上ベンチに座つて目の前の光景を眺めているだけだった。

そこにはジョギングで汗を流している人やレジャーシートを敷いて寝そべっているカップルがいる。親子でキャッチボールをしていたり、兄弟で追いかけっこをしている姿があれば、少し離れたところでは老夫婦が仲睦まじく並んでベンチに腰掛けている。

老若男女を問わずここにいるすべての人があい想いに過ごしているように見えた。幸せと呼べる光景があるとすれば、目の前に広がるこの世界を言うのかもしない。なぜならこれだけの人が集まっているのにみんな楽しそうで顔には笑顔があり、生気に溢れている。そして誰一人としていがみ合っている人がいないのだ。

翻つて日常生活を見ればどうだろう。平日の自分の姿を思い浮かべた。朝の満員電車然り、仕事上の様々なトラブル然り、ストレスに満ちた毎日である。そう思うのは僕だけではないはずだ。同じ人間同士、どうしてこうも違うのか。どこで違つてしまつたのだろう。

答えは「歩く速度にあり」。そう仮説を立ててみた。ジョギングをしている人を見てそう思つた。彼は何も全力で走つてゐるわけではない。周りの景色を楽しみながらゆっくり走つてゐる。そうした目で見れば親子のキャッチボールも山なりで、ボールの速度がゆっくり見えてくるし、遊歩道を歩いている人たちも景色を見ながら、

あるいは連れと会話をしながらゆっくり歩いてくる。

一方で平日の僕たちは田代めからすでに急いでいる。朝の支度から始まって駅のホームや仕事の準備など会社の始業時間にとにかく間に合ひように知らずと駆け足になってしまっている。電車なんてすぐに次がやってくるのに、それを待つ余裕さえ持てずに多くの人が駆け込んで車内アナウンスで注意を受けている。

そんなに急いで何が変わるというのか。無理をして急ぐからストレスになるのであって、この公園にいる人たちのようにゆっくり過ごしてみれば心に余裕が生まれ、それが仕事の進め方に良い影響を与えてくれるかもしれない。それが昨日とは違った今日となり、その積み重ねがいつか目の前のこの幸せな光景になっていくのではないか。すべてはつながっているのである。その第一歩が「ゆっくり歩いてみる」こと。今より少しでいいから速度を落として歩いてみれば見える景色もきっと変わってくれるはず。

## 第 1 話 幸せな人たちの共通点（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。  
あなたの励ましの一言が次の執筆意欲につながっています。  
これからも温かく見守ってください。

## 第2話 娘の誘いを断るほとひだりなものの

「ぱぱー、ぱぱー」

声のした方へ目を向けると、一人娘の千也香だった。小さな体で走ってきたせいか息を切らせていく。それでもよほど僕に伝えたいことがあつたのだろう、切らせた息を飲み込みながら口にした。

「ま、まの、かわりに、ぱとみんとん、してくれる?」

千也香の走ってきた先で妻の真紗子が手を振っていた。

「ああ・・・・」

思わず言葉が漏れてしまった。これまで周りのことばかり見ていたけど僕と千也香、そして真紗子は今、一直線上にいた。何だ、ここにも幸せがあるじゃないか。

恋人や友達、そして家族。そのつながりは通常目に見えない。一緒にいるからつながっているかといえばそんなことはない。同じ屋根の下で暮らしているのに言葉を交わさない親子や夫婦がどれだけいるだろう。作り笑いをして恋人や友達の「ふり」をしている人たちがどれだけいるだろう。しかし、そのつながりが見えたときには特別なものを感じ、そして安心する。僕にはそのつながりが今、見えた。

「ぱぱー?」

千也香は僕の返事を待っていた。さっきまでの息切れはすでになくなっていた。

「パパはもう少しここにいたいから、これでママと一緒にジュースでも買っておいで」。

財布から一人分のジュース代を取り出して千也香に渡すと、肩を落としながら真紗子の元へ戻つて行く。

「千也香、ごめんな。この埋め合わせは必ずするから」

この公園で何がしたいのか？この問いは一人娘のお願いを断るほど大事なものなのだろうか。どうも調子が狂う。幸せや家族について改まつて考えたことなどこれまでなかつたに。それもこれもすべては「あのメール」を見つけてしまつたからだつた。

## 第2話 娘の誘いを断るほど大事なもの（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。  
あなたの励ましの一言が次の執筆意欲につながっています。  
これからも温かく見守ってください。

## 第3話 結婚の決め手となつたもの

昨晩、連絡が途絶えて何年も経つ前の会社の同僚からメールが届いた。あまりに突然の出来事で田を疑つた。中村つて「あの中村」だよな？

中村は前の会社でトップ営業マンだった。成績はいつも上位で、全国の支店間でもたびたび入賞を果たして表彰されることもあった。それだけでなく男の僕から見ても男前で、性格もいい。誰に対しても公平で、分け隔てなく接することができる。中村の周りにはいつも人が集まっていた。

完全無欠に見えるそんな中村にも、唯一といえる欠点があった。女性と会話ができるのだ。もちろん仕事上のことであればいくらでもできるが、プライベートとなるとトップ営業マンの話術は微塵も発揮されない。

中村がフられた日、朝まで励ましたことがあった。フられる理由はいつも同じ。「あなたは何も話してくれない」「電話やメールをするのはいつも彼女からで、中村からはほとんどしない。どうして連絡してあげないと聞いてみると、話すことがないと呟く。

「女は話を聞いてもらいたい生き物だろ？なのになぜオレが話さなければいけないんだ」

酒が入った中村は饒舌だった。僕は聞き役に徹した。

「電話をかけてきたって何も話さないんだぜ？あなたの声が聞きたいのか言って。用がないならメールでいいとは思わないか？」

「何だつていいんじゃないか？お前の仕事の話でもすれば喜んで聞いてくれると思うよ」

「そんなのでいいのか？女ってソムリエみたいな、『貴婦人のような』とか比喩を使った愛の言葉をさらやいてもらいたいんじゃないのか？」

中村が女性と会話ができない理由がわかつた。女性を難しく考えすぎているのだ。僭越ながら僕は中村にアドバイスをさせてもらつた。

「お前が良く使つ『相手を褒める技術』を彼女に使つてあげれば、きっと喜んでくれると思うよ」

今度は中村が聞き役に徹して、時折メモを取りながらの恋愛レクチャーが朝まで続いた。

この件があつて中村とは仲良くなつたが、僕が転職して次の会社へ移つてしまつたため疎遠になつてしまつた。

中村から久しぶりに届いたメールの内容は、

「今彼女にプロポーズした。OKの返事をもらつた。すべてお前に教えてもらつたとおりだつた。心から礼を言つよ。ありがと」

僕に教えてもらつたとおりと書いてある。何のことだ？僕は中村に何を教えたのだろう。

近況報告を兼ねて聞きたいことは山ほどあつたが、親友のお祝いに水を差したくはない。手短にメールを返した。

「おめでとう。早くやった。それで結婚の決め手は？」

中村からすぐメールが返ってきた。

「お前の『言だよ

### 第3話 結婚の決め手となつたもの（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。  
あなたの励ましの一言が次の執筆意欲につながっています。  
これからも温かく見守つてください。

## 第4話 おはよー

僕の一言？ますますわからない。その答えを求めてメールを送ったが返事は返つてこなかつた。再度メールすることも考えたがまだ彼女と一緒にいるかもしれない。答えが届くまでの間、中村に言つたとされる「僕の一言」をやたらと思い出してみよつと思つた。

当時の中村とのメールのやりとりがまだフォルダに残つていた。  
たとえば九月十四日、

「付き合つて三ヶ月持たずにフラれた。やっぱり話してくれない  
からだと。今回はオレ、がんばったのに」

十月十一日、「取引先の女の子が気になつていて。何て声をかけ  
たらい？」

十月二十八日、「何とかデートにこきつけた。ビニに誘つたらい  
い？」

当時の思い出がよみがえつてくる。中村は自分の欠点を知つてい  
た。それができないことでもがき、苦しんでもそこから逃げなかつ  
た。僕にメールを送りアドバイスを求めることで自分の欠点に立ち  
向かつていつたのだ。

僕も面倒くさがらずにその都度アドバイスをした。それは友達と  
いうこともあるが、僕自身も同じような経験があつたからだ。そう。  
恋愛の師匠と呼べる人に僕も中村と同じようなことをした。だから  
決して他人とは思えなかつたのだ。

それにしても女性が苦手だったあの中村がいよいよ結婚か……。  
人は成長するものだと感慨深かつた。

成長は決して一人でできるものではない。成長の陰には必ず自分を押し上げてくれる人の存在がある。僕が真紗子と結婚したのもひとえに師匠のおかげだ。

「あれ……？」

僕の一言つてもしかして真紗子との結婚に関係あるのか？何だけ？

中村から返信はまだこない。「僕の一言」が頭から離れなくなり、次のフォルダに答えを求めた。ここには中村以外にもたくさんメールが入っていた。ご丁寧に「有明だよ」というメールまで残っている。メールアドレスを見ても、その内容もまったく記憶にない。

このメールをなぜ削除しなかったのかまったくの謎だ。他にも中村とは関係のない、そうした類のメールが多くなった。件数も多いし、別のフォルダを開こうとしたそのときだつた。

「おはよう」

目が釘付けになつた。そんなはずはない。彼女からのメールはすべて削除したはずだ。

「あつー」

なんと、保護されていた。しかもこのメールだけ別のフォルダに振り分けられていたので、削除したつもりができていなかつた。日

付は？「十一月二十九日」。間違いない、彼女から最後のメールが届いた日だ。

「思い出したぞ、僕が中村に言つた一言を

思わず叫んだ。叫ばずにはいられなかつた。中村だけではない。僕が真紗子と結婚できたのも、そしてあの失恋を乗り越えられたのも、すべて彼女が教えてくれた「一言」のおかげだった。

## 第4話 おはよひる（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。  
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。  
これからも温かい目で見守ってください。

## 第 5 話 別れた理由が知りたくて

「今夜から明日朝にかけて厳しい冷え込みになりそうです」

テレビから流れる天気予報にも上の空だった。

一応、留守電にはメッセージを入れておいたけど、電話がかかってくることはないだろう。あの日を最後に洋子は電話に出てくれない。一体どうしてこうなってしまったのか。

僕が悪いのはわかっている。「別れましょ」と言われてもそれを受け入れられず、「電話しないで」と言われても電話してしまう。どうしてこうなったのか、その理由がわからないかぎり自分を止めることができなかつた。なぜここまで嫌われなければいけないのか。好きという気持ちも消えてしまつものなのか。

友達にも相談した。彼らの答えは皆同じだった。

「あきらめたほうがいい」

でも、誰に何を言われようが洋子は戻つてきてくれると言じていた。なぜなら僕たちは「運命の人」だから。

運命の人とはいいくつもの偶然が重なり合う人のこと。そうでなければこのすれ違う世の中はどうして男女が出会い、恋をすることができるだろう。たとえば僕たちにはこんな偶然があった。メール送信と同時に電話がかかってきたのである。メールを送つた側はこのときどう思つだろうか。

僕は洋子の声が聴きたくて家の電話から電話したことがあった。  
そしたら洋子は不思議そうに聞いてくる。

「もうメール届いたの？」

僕はメールが苦手で、その返事を電話で応えることが習慣になつていたために洋子はそう聞いたのだろう。しかしメールは届いておらず、洋子がこのとき何を言つてているのかわからなかつたので聞いてみた。

「そのメールに何て書いたの？」。

洋子がメールの内容を話し出そうとしたそのときだつた。机の上に置いてある携帯電話が鳴り出して、画面を見てみると「新着メール」と表示されていた。

「もしかして、今届いたこのメールのことを見つけるの？」

そう尋ねると、受話器越しに洋子の異変が伝わってきた。

「ねえ、聞いてる？」  
「大好き」  
「いや、そういう訳なくて……」  
「大好き」  
「だから、違うって……」  
「大好き」  
「じゃあ、ゴキブリも？」  
「それは嫌い、でも大好き」

「この偶然がよほどうれしかったのだろう。僕のいじわるを除いて、洋子は何を聞いても「大好き」としか言わなかつた。何度も何度も、心に溢れる感情をすくい出し、それをそのまま僕に届けてくれたのだ。

洋子が僕の誕生日を祝つてくれたときもそつだつた。それまでの楽しい会話から一転、洋子は突然黙り込み、うつむいてしまつた。

「どうしたのだろう?」

僕は事態の状況を飲み込めなかつた。何か失礼なことを言つてしまつたのだろうか。しかし、そうでないことは洋子の次の一言ですぐにわかつた。黙り込んだのなく、それを言おうかどうしようかためらつていたのだ。

「実は、前の彼と別れた日が今日なの」

洋子が自分から過去の男の話をしたのは初めてだつた。この日のために用意した、洋子なりのサプライズなかもしれない。

別れは出会いの始まりだと言つ。たしかに第三者的にはそうかもしないが、当事者にとつてその実感を得るのはもう少し先である。別れた悲しみを乗り越えて、その出会いに気づくまでにはどうしたつて時間がかかる。しかし、それが具体的な形となつて表れたとしたらどうか。たとえば前の彼と別れた日が、次に好きになつた人の誕生日だとしたら? これ以上の「別れは出会いの始まり」を表すものが他にあるだろうか。

## 第 5 話 別れた理由が知りたくて（後書き）

いつも感想をありがとうございます。  
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。  
これからも温かい目で見守ってください。

## 第 6 話 洋子との馴れ初め

洋子は僕と出会つ前、悲しみのどん底でもがいていた。見るに見かねた友人の美穂子が励ましてあげてほしいと紹介したのが僕たちの馴れ初めだつた。

その晩、洋子が電話をするからよろしくねと美穂子は言つた。悲しんでいる女性を励ますことなどまるで自信がなかつたが、引き受けてしまつたからには後には引けない。僕を紹介した美穂子の面子だつてある。

洋子から電話がかかつてくるまでにやるべきことはしておきたかった。とりえあえず思いついたことといえば本屋へ行つて「元気になる言葉」関連の本を見繕つて、夜の電話に備えることだつた。

「明けない夜はない」

「止まない雨はない」

「夜明け前が一番暗い」

ページを開く度に「元気になる言葉」が表れる。世の中には人を励ますたくさんの言葉があるのだと思つた。

当時の僕は新入社員で、若葉マークの駆け出しもいいところだつた。仕事を覚えるだけで精一杯で、慣れない生活が続きどこか疲れていたのかもしれない。洋子を励ますつもりで用意した「元気になる言葉」に僕自身が励まされ、少し元気になつたような気がした。

いつの間にか本の世界へと引き込まれてしまつた僕に、携帯の着信音が本来の目的を思い出させてくれた。ついにそのときがやつて

きたのだ。僕はひとつ深呼吸をして、携帯を取り上げた。

「もしもし」

「元気になる言葉」をいつでも取り出せるよに、何なら僕がついついアンダーラインを引くくらい共感した言葉を紹介しようと横に置いて励ます気満々でいたのだが、結局本の出番はなかつた。

お互いの自己紹介から始まって、共通の友人である美穂子のことや世間話に終始して、気がつけば三時間以上話をしていた。

普通に楽しかつた。電話がかかってくるまでの不安を思い返せば笑わずににはいられない。取り越し苦労とはこのことを言うのだろう。つい先日、上司に言われたことを思い出した。

「仕事は段取りでほとんど決まる」

仕事に取り掛かる前は、あらゆることを想定して準備を怠るなど徹底的に仕込まれた。当時はその意味がわからず無駄な作業が多いのを非効率的に思っていたが、実際にそれでうまくいくことは多かつたし、今回もうまくいった。

要するに始まる前は不安が付きまとつてネガティブ思考になりがちだけど、準備をして頭や体を動かすことで一つずつ不安を消していく。流した汗は自信に替わり、望む結果が生まれやすくなる。上司はそう言いたかったのだろう。

最初の電話で話が合つた僕たちは次の日も、また次の日も電話で話をした。不思議なことだが、

「今日何してたの？」

たつたそれだけで一時間以上も会話が続いた。こんな人初めてだつた。洋子もそう思ったのだろう。話を続けていくうちに笑いがひとつ、またひとつ増えていった。洋子とは電話だけでなく、メールやデートを通して関係が深まつていった。

## 第 6 話 洋子との馴れ初め（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。  
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。  
これからも温かく見守ってください。

## 第 7 話 運命の人が見つかった

ある日のこと。一緒にご飯を食べる約束をしていたが、僕の仕事が早く終わり洋子を駅の改札まで迎えに行つたことがあつた。ちょうどラッシュと重なつて改札付近はとても混雑していた。これでは洋子を見つけるれないと思い、僕は改札近くのコンビニでこのことをメールで告げた。

しかし約束の時間を五分、十分と過ぎても洋子は現れない。時間に厳しい洋子には珍しいことだつた。事故にでもあつたのか？一抹の不安が頭をよぎる。十五分を過ぎても現れなかつたので心配になり電話をした。呼び出し音が鳴つたとほぼ同時に洋子は電話に出た。

「もしもし、今どー?」

洋子から意外な答えが返つてきた。

「あなたの隣よ」

携帯電話を持ちながら左右を確認した。何と僕の左隣に微笑んでいる洋子が立つていいではないか。

話を聞くと約束の時間より少し早く到着したようだ。洋子は僕にすぐ気づいたが、僕がなかなか気づかないことに腹を立て、僕の目の前を何往復もしたそうだがそれでも僕は気づかなかつたそうだ。でも自分を探している真剣な表情がうれしくて、その姿を横で見ていたといつ。

着いたら声をかけてくれればいいのに……。でも、僕の鈍さ

が招いたことだから言つに言えなかつた。

「あれつ？」

僕の声に反応した洋子はバックに携帯電話をしまいながら尋ねた。

「なあに？」

「それ見せて」

「それって？」

「携帯」

僕の携帯電話の色は淡いブルー。洋子も同系統の色を持っていることは前から知っていたが、色があまりにも似すぎていたのでこの機会に一つの携帯電話を並べて確かめてみようと思つた。

「うわっ！」

ほぼ同時に一人は声を上げた。そうなつてほしいと願つたことはあつたが、まさか本当に実現するとは・・・。僕たちの携帯電話は同じ機種だったのである。しかも色まで同じ。

それが最近発売された機種ならまだわかる。しかしそうではなくて、かれこれ一年近く前のものである。その間どれだけの機種が各メーカーから発売されただろう。そう思つと運命的なものを感じずにはいられなかつた。

「すごいね」

「うん、す『』い」

「まさか同じ携帯だつたなんて・・・」

「そもそもそうだけど、これを見て」

二人が同じ機種で色まで同じ。これ以上に驚くことが他にあるのか。洋子はそれを手にとつて見せた。

「このストラップ」

「うわっ！」

僕は今日三度田の声を上げた。一台並んだ同じ携帯電話の先についているストラップはこれまた同じ「天使の翼」だった。

「どうしたの、これ？」

「うん。これを付けていると、好きな人に想いを届けてくれるんだって」

ここまでくると驚きを通り越して笑えてくる。理由まで同じだつた。本来ストラップをつけないこの僕が、天使の翼だけは付けている。口下手な僕が好きな人に想いを伝える方法はただ一つ、道具に頼ることだった。周りから成功体験は聞いていたし、これを付けていれば想いは届くんだと自信を持つて気持ちを伝えることができる、いわばお守りのようなもの。なかなかその機会は巡ってこなかつたが、いつか巡ってきたら十分に活躍してもらおう。出会いなどいつも訪れるかわからない。チャンスを逃すくらいなら、頼れるものには何でも頼ろうと思つて付けていた。

その晩の僕たちはこの二つの偶然に興奮していた。食事をしながらずつとこの会話で盛り上がった。

「この台詞が何度出てきたかわからない。僕だけでなく洋子もきっ

と運命的なものを感じたに違いない。天使の翼はこのとき僕たちの想いを届けてくれたのだ。

## 第7話 運命の人が見つかった（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。  
あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながります。  
これからも温かく見守ってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5839y/>

大事なことはすべて失恋から学んだ

2011年11月24日23時01分発行